現代文Ｂ　３年２・３組

蠅

横光利一

一

真夏の宿場は空虚であった。ただ目の大きな一匹の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の巣にひっかかると、後肢で網を跳ねつつしばらくぶらぶらと揺れていた。と、豆のようにぼたりと落ちた。そうして、馬糞の重みに斜めに突き立っている藁の端から、裸体にされた馬の背中まではい上がった。

二

馬は一条の枯れ草を奥歯にひっかけたまま、猫背の老いた馭者の姿を捜している。

馭者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、将棋を三番さして負け通した。

「なに？　文句を言うな。もう一番じゃ。」

すると、ひさしを逃れた日の光は、彼の腰から、円い荷物のような猫背の上へ乗りかかってきた。

三

宿場の空虚な場庭へ一人の農婦が駆けつけた。彼女はこの朝早く、街に勤めている息子から危篤の電報を受け取った。それから露に湿った三里の山路を駆け続けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馭者部屋をのぞいて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

ゆがんだ畳の上には湯飲みが一つ転がっていて、中から酒色の番茶がひとり静かに流れていた。農婦はうろうろと場庭を回ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかの？」

「先刻出ましたぞ。」

答えたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早よ来るとよかったのじゃが、もう出ぬじゃろか？」

農婦は性急な泣き声でそう言ううちに、はや泣きだした。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立っていてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は将棋盤を見つめたまま農婦に言った。農婦は歩みを止めると、くるりと向き返ってその淡い眉毛をつり上げた。

「出るかの。すぐ出るかの。せがれが死にかけておるのじゃが、間に合わせておくれかの？」

「桂馬と来たな。」
「まアまアうれしや。街までどれほどかかるじゃろ。いつ出しておくれるのう。」
「二番が出るわい。」と馭者はぽんと歩を打った。
「出ますかな、街までは三時間もかかりますかな。三時間はたっぷりかかりますやろ。せがれが死にかけていますのじゃ、間に合わせておくれかのう?」

四

野末の陽炎の中から、種れんげをたたく音が聞こえてくる。若者と娘は宿場の方へ急いで行った。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。
「持とう。」
「なアに。」
「重たかろうが。」
若者は黙っていかにも軽そうな様子を見せた。が、額から流れる汗は塩辛かった。
「馬車はもう出たかしら。」と娘はつぶやいた。
若者は荷物の下から、目を細めて太陽を眺めると、
「ちょっと暑うなったな、まだじゃろう。」
二人は黙ってしまった。牛の鳴き声がした。
「知れたらどうしよう。」と娘は言うとちょっと泣きそうな顔をした。
種れんげをたたく音だけが、かすかに足音のように追ってくる。娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。
「私が持とう。もう肩が治ったえ。」
若者はやはり黙ってどしどしと歩き続けた。が、突然、「知れたらまた逃げるだけじゃ。」とつぶやいた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を引かれた男の子が指をくわえて入ってきた。
「お母ア、馬々。」
「ああ、馬々。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ駆けてきた。そうして二間ほど離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりゃッ、こりゃッ。」と叫んで片足で地を打った。
馬は首をもたげて耳を立てた。男の子は馬のまねをして首を上げたが、耳が動かなかった。で、ただやたらに馬の前で顔をしかめると、再び「こりゃッ、こりゃッ。」と叫んで地を打った。
馬はおけの手づるに口をひっかけながら、またその中へ顔を隠して馬草を食った。
「お母ア、馬々。」
「ああ、馬々。」

六

「おっと、待てよ。これはせがれの下駄を買うのを忘れたぞ。あいつはすいかが好きじゃ。すいかを買うと、俺もあいつも好きじゃで両得じゃ。」

田舎紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。四十三年貧困と戦い続けたかいあって、昨夜ようやく春蚕の仲買いで八百円を手に入れた。今彼の胸は未来の画策のために詰まっている。けれども、昨夜銭湯へ行ったとき、八百円の札束を鞄に入れて、洗い場まで持って入って笑われた記憶については忘れていた。

農婦は場庭の床几から立ち上がると、彼のそばへ寄ってきた。

「馬車はいつ出るのでござんしょうな。せがれが死にかかっていますので、早よ街へ行かんと死に目に会えまい思いましてな。」

「そりゃいかん。」

「もう出るのでござんしょうな、もう出るって、さっき言わしゃったがの。」

「さアて、何しておるやらな。」

若者と娘は場庭の中へ入ってきた。農婦はまた二人のそばへ近寄った。

「馬車に乗りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」

「出ませんか？」と若者はきき返した。

「出ませんの？」と娘は言った。

「もう二時間も待っていますのやが、出ませんぞな。街まで三時間かかりますやろ。もう何時になっていますかな。街へ着くと正午になりますやろか。」

「そりゃ正午や。」と田舎紳士は横から言った。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにゃ死にますやろな。正午になりますかいな。」

と言ううちにまた泣きだした。が、すぐ饅頭屋の店頭へ駆けていった。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬじゃろか？」

猫背の馭者は将棋盤を枕にしてあおむきになったまま、すのこを洗っている饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さらんかいのう？」

七

馬車は何時になったら出るのであろう。宿場に集まった人々の汗は乾いた。しかし、馬車は何時になったら出るのであろう。これは誰も知らない。だが、もし知りうることのできるものがあったとすれば、それは饅頭屋のかまどの中で、ようやく膨れ始めた饅頭であった。なぜかと言えば、この宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけるということが、それほどの潔癖から長い年月の間、独身で暮らさねばならなかったという彼のその日その日の、最高の慰めとなっていたのであったから。

八

宿場の柱時計が十時を打った。饅頭屋のかまどは湯気を立てて鳴りだした。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切った。馬は猫背の横で、水を充分飲みためた。

ザク、ザク、ザク。

九

馬は馬車の車体に結ばれた。農婦は真っ先に車体の中へ乗り込むと街の方を見続けた。

「乗っとくれやア。」と猫背は言った。
五人の乗客は、傾く踏み段に気をつけて農婦のそばへ乗り始めた。
猫背の馭者は、饅頭屋のすのこの上で、綿のように膨らんでいる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと馭者台の上にその背を曲げた。らっぱが鳴った。むちが鳴った。
目の大きなかの一匹の蠅は馬の腰の余肉の匂いの中から飛び立った。そうして、車体の屋根の上にとまり直ると、今さきに、ようやく蜘蛛の網からその生命を取り戻した体を休めて、馬車と一緒に揺れていった。
馬車は炎天の下を走り通した。そうして並木をぬけ、長く続いた小豆畑の横を通り、亜麻畑と桑畑の間を揺れつつ森の中へ割り込むと、緑色の森は、ようやくたまった馬の額の汗に映って逆さまに揺らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以来の知己にした。しかし、男の子はひとり車体の柱を握って、その生き生きした目で野の中を見続けた。
「お母ア、梨々。」
「ああ、梨々。」
馭者台ではむちが動き止まった。農婦は田舎紳士の帯の鎖に目をつけた。
「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」
馭者台ではらっぱが鳴らなくなった。そうして、腹掛けの饅頭を、今やことごとく胃の腑の中へ落とし込んでしまった馭者は、いっそう猫背を張らせて居眠りだした。その居眠りは、馬車の上から、かの目の大きな蠅が押し黙った数段の梨畑を眺め、真夏の太陽の光を受けて真っ赤に映えた赤土の断崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下ろして、そうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみだす音を聞いてもまだ続いた。しかし、乗客の中で、その馭者の居眠りを知っていた者は、僅かにただ蠅一匹であるらしかった。蠅は車体の屋根の上から、馭者の垂れ下がった半白の頭に飛び移り、それから、ぬれた馬の背中にとまって汗をなめた。
馬車は崖の頂上へさしかかった。馬は前方に現れた目隠しの中の路に従って柔順に曲がり始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車体の幅とを考えることはできなかった。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車体に引かれて突き立った。瞬間、蠅は飛び上がった。と、車体と一緒に崖の下へ墜落していく放埒な馬の腹が目についた。そうして、人馬の悲鳴が高くひと声発せられると、河原の上では、圧し重なった人と馬と板片との塊が、沈黙したまま動かなかった。が、目の大きな蠅は、今や完全に休まったその羽根に力を込めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいった。

一．空欄に当てはまる適当な言葉を本文中から抜き出し、内容の整理をしなさい。
解答はすべてノートに記載しなさい。

第一段

一　真夏の宿場には誰もいない。一匹の蠅が〔①　　〕にひっかかり、後肢で網を跳ねつつ揺れた後、ぽたりと落ちた。蠅は馬の背中まではい上がる。

二　「なに？　文句を言うな。もう一番じゃ。」
←
駄者は宿場の横の饅頭屋の店頭で〔②　　〕をさし続けていた。

←

第二段

三　宿場の場庭に農婦が駆けつけた。農婦は早朝、街に勤める息子から〔③　　〕を受け取ったのである。

四　次に若者とともに登場した娘は、誰かが〔④　　〕のではないかと不安に思っている。

五　続いて母親と手をつないで現れた男の子は、厩の方へ駆け寄っていく。

六　最後に現れた田舎紳士は、前の日に〔⑤　　〕を手に入れていた。農婦は、饅頭屋の店頭に駆けていき、出発はまだかと尋ねるが、駄者ははかばかしい返事をしない。

←

第三段

七　馬車は何時になったら出るのであろう。
↓それを知りうるものがあったとすれば、それはようやく膨れ始めた〔⑥　　〕であった。
←なぜなら
駄者は、蒸し立ての饅頭に初手をつけることを毎日の〔⑦　　〕としていたから。

八　十時になると、饅頭屋のかまどが湯気を立てて鳴りだした。駄者は馬草を切り、馬はその横で水を飲みためて出発に備える。

第四段

九　出発の準備が整うと、真っ先に〔⑧　　〕が乗り込み、ほかの乗客もこれに続いた。出発した馬車は炎天の下を走り通し、並木や畑をぬけ、やがて〔⑨　　〕の中へ入っていった。

十　饅頭を食べきった馭者は〔⑩　　〕を始める。崖の頂上で馬車は脱輪し、馬や乗客もろとも崖の下に墜落した。その一部始終を見ていた蠅は、悠々と〔⑪　　〕を飛んでいった。

←

二．次の問いに答えよ。

解答はすべてノートに記載しなさい。

1 「蜘蛛の巣にひっかかると」とあるが、この時の蠅はどのような状態か。次の中から適当なものを一つ選べ。

ア　くつろいだ状態　　イ　もがき苦しむ状態
ウ　楽しそうな状態　　エ　いきいきした状態

2 「もう一番じゃ。」とあるが、この時の馭者の心情として適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア　悔しさ　　イ　焦り
ウ　待ち遠しさ　　エ　面倒くささ

3 「その淡い眉毛をつり上げた。」とあるが、この時の農婦の心情を説明した次の文の空欄①・②に、当てはまる言葉を、本文中から抜き出せ。また、空欄A・Bに当てはまる言葉として適当なものを、後の語群から選べ。

〔　①　〕ので、一刻も早く街に行きたいのに、馬車はもう出たと言われて〔　A　〕を感じていたが、〔　②　〕ことが分かり、馭者に〔　B　〕の目を向けている。

ア　疑念　　イ　焦り　　ウ　不満　　エ　怒り　　オ　軽蔑　　カ　期待

4 「若者と娘は宿場の方へ急いで行った。」とあるが、二人は何をするために急いでいるのか。それについて説明した次の文の空欄に、空欄①・②の文字数に合わせた言葉を、本文中から抜き出せ。

誰かが（　①　5文字　）のを振り切って、二人で遠くへ（　②　3文字　）ため。

5 「男の子は母親から手を振り切ると」とあるが、この時の男の子の心情を表した言葉として適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア　恐怖心　　イ　敵対心　　ウ　好奇心　　エ　羞恥心

6 「未来の画策」とあるが、この表現の意味について説明した次の文の空欄①・②に文字数に合わせた言葉を、本文中から抜き出せ。

それまで〔 ① 二文字 〕に苦しめられてきた田舎紳士が、前日の夜、初めて〔 ② 一五文字 〕ので、これからそれを何に使おうかと思いを巡らせていたということ。

7 「饅頭はまだ蒸さらんかいのう?」とあるが、馭者のこの言葉について説明したものとして適当なものを、次の中から一つ選べ。

ア 馬車はまだ出発しないのかと案じる農婦たちとのすれ違いを描き出すことによって、客よりも饅頭を大切にする馭者の身勝手な判断を表現している。

イ 饅頭にばかり気を取られる馭者の自己本位な様子を描き出すことによって、馭者の怠慢と、そのせいでこの後に起こる事故の悲惨さを表現している。

ウ 農婦の問いかけを無視して饅頭ができたかどうかばかりを気にする馭者の様子を誇張して表現することによって、食い意地が張った彼の特徴を表現している。

エ 馬車はまだ出ないのかと尋ねる農婦へのとぼけた受け答えを描くことによって、饅頭ができなければ出発しないと決めている馭者の一徹さとユーモアを表現している。

8 「宿場に集まった人々の汗は乾いた。」とあるが、これはどのような状況を表現しているか。四〇字以内で答えよ。

9 「独身で暮らさねばならなかった」とあるが、それはなぜか。その理由を説明した次の文の空欄①・②に文字数に合わせた言葉を、本文中から抜き出せ。

毎日、〔 ① 二一文字 〕なければ気がすまないほど、〔 ② 二文字 〕な性格だったから。

10 「ザク、ザク、ザク。」とあるが、これは何を表現しているか。本文中の言葉を用いて一〇字以内で答えよ。

11 「らっぱが鳴った。むちが鳴った。」とあるが、これは何がどうしたことを示しているか。一〇字以内で答えよ。

12 「目の大きな蠅」について、次の問いに答えよ。

(1) 次の文は、作品全体における蠅の動きについて整理したものである。空欄①～⑤に、文字数に合わせた言葉を、本文中から抜き出せ。

蠅は、初めは〔 ① 十一文字 〕にひっかかり、生命の危機に見舞われていた。しかしそこから落ちた後、〔 ② 四文字 〕にはい上がった蠅は、馬車が出発すると

〔　③　七文字　〕にとまって十分に羽根を休め、馬の背中で汗をなめ、すっかり息を吹き返した。やがて蠅は、馬車が脱輪した瞬間に飛び上がり、人馬と車体がともに〔　④　十文字　〕光景を一望した後、羽根に力を込めて〔　⑤　十四文字　〕のであった。

(2) 次の文は、最後の場面が蠅の「目」を通して描き出されていることの効果を説明したものである。空欄に当てはまる言葉を、一五字以内で答えよ。

誰も予期できなかった悲惨な事故が、人物たちの混乱や恐怖に感情移入することなく客観的に描き出され、その現場が高みから見下ろされているため、〔　　〕を読者に強く印象づける効果がある。